

はばたけ ヒコヤン

——少年鵜匠物語

赤座憲久 作 井口文秀 絵



はばたけヒコヤン

昭和55年 8 月21日

第1刷

著者 赤座憲久

発行者 江口克彦

発行所 PHP研究所

〒601 京都市南区西九条北ノ内町11

電話 075(681)4431 <代表>

東京事務所 03(295)9211

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 和田製本工業株式会社

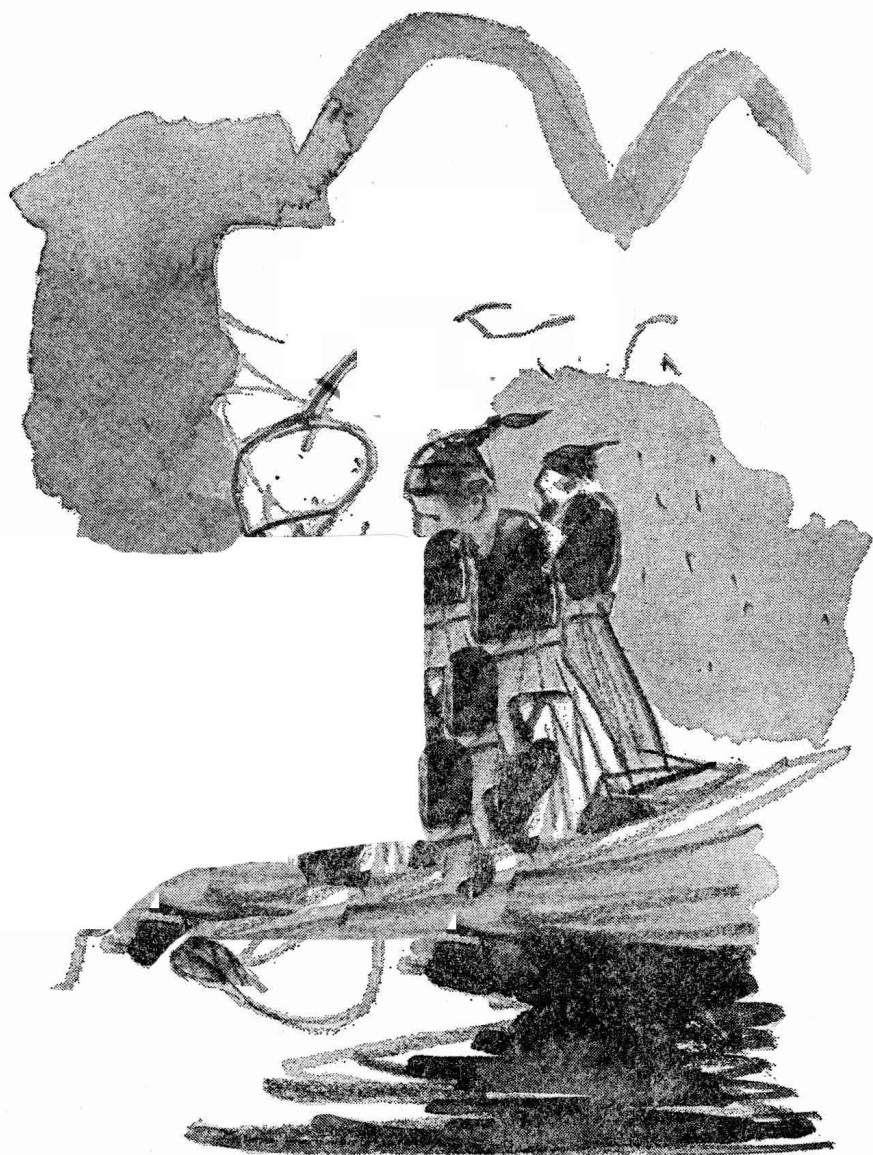
© 1980 Norihisa Akaza. Printed in Japan.

乱丁・落丁本はご面倒ですが弊所出版部宛お送り下さい。送料弊所負担にてお取り替え致します。

ははたけヒコヤン

——少年鵜匠物語

赤座憲久 作 井口文秀 絵



はじめに

——長良川の鵜飼——

飼いならしたタカを放^{はな}つて、鳥やウサギをとる狩^かりは、古くから世界各地でなされてきました。それをタカ狩^がりといい、タカを使う人を、日本ではタカ匠^{じょう}といいました。

鵜^うを飼^かいならしてサカナをとることも、日本だけでなく古くからありました。鵜飼^{うかい}いというのがそれです。

岐阜^{ぎふ}の長良川^{ながらがわ}の鵜飼^{うかい}いでは、野性^{やせい}の海鵜^{うみう}を飼^かいならします。クチバシがするどくて、のどぶくろが大きいからです。

毎年五月十一日から十月十五日まで、むかしながらの鵜飼^{うかい}いの人々にみせ

ています。夕やみが川原や川をつつみはじめるころ、六そこの鵜舟うづねのそれぞれ一番前に鵜匠うしやうがたつて、かがり火をたきながら十二羽の鵜を使い、船頭が舟をこぎだします。中鵜なかうづか使いは自分の力によって、四羽とか六羽とかの鵜の手縄たなわをもちます。

出番をまちかねていたように、鵜うは水面すいめんではばいたり、水にくぐったりしてアユを追いかけて、船頭はアユのいそうなところへ舟をこぎすすめ、舟ばたをサオでたたいて鵜をはげますのです。

流れながにのつてくだる鵜舟うづねのかがり火は、音をたててもえさかり、鵜は勝手かつてに動きまわりますが、鵜匠うしやうの手もとの手縄たなわは、けっしてもつれません。それがなんととっても大きなものでしょう。

古くからの人間にんげんの知恵ちえによってうまれた鵜飼うかいいを、美しい川すじにつたえられるのは、人間の思いがけないほど多くのしあわせにかかわるはずです。

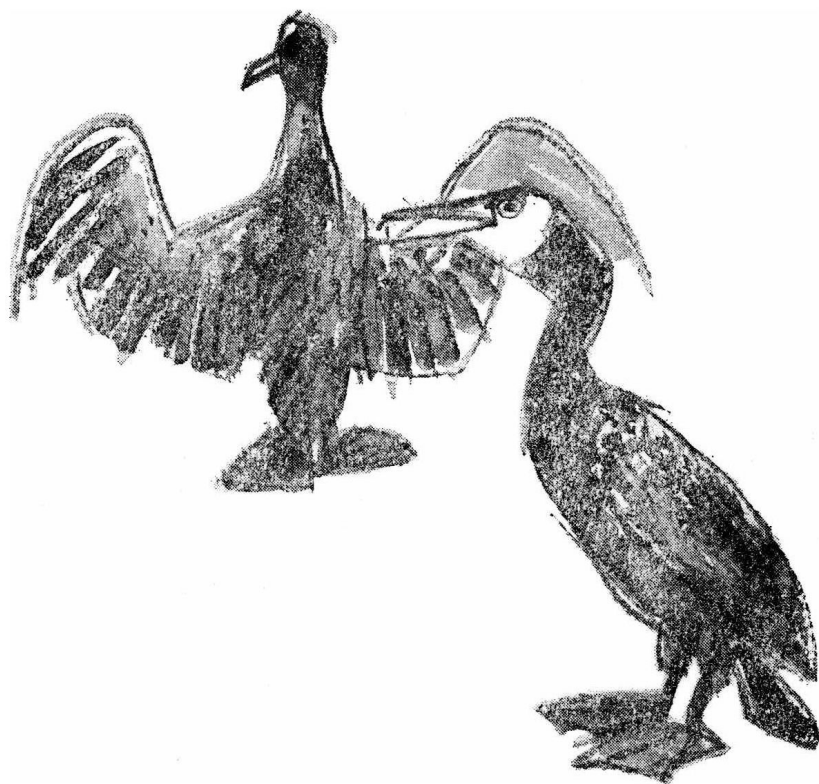
ダムがひとつもないという自然しぜんの流れを誇ほこっていた長良川ながらがわなのですが、河口かこうにセキがつくられようとしていたりして、いろいろ心配しんぱいなこともおこっています。街の中ほどを、こんな美しい川が流れているのは、世界でも例が少ないと思います。その長良川に心をひかれ、川のほとりにわたしがすみついたのは、もう二十数年前のことです。幼かったわたしの娘が、川畔へさんぽにいった、「川底の石が目をさませている」と叫んだことがありました。川底の石を、数えることができるほど水が澄んでいたのです。

心ある人々のねがいをだいじにして、この物語ものがたりを今書きおえました。

一九八〇年五月、長良川の川びらきの夜。

赤 座 憲 久

—— もくじ ——



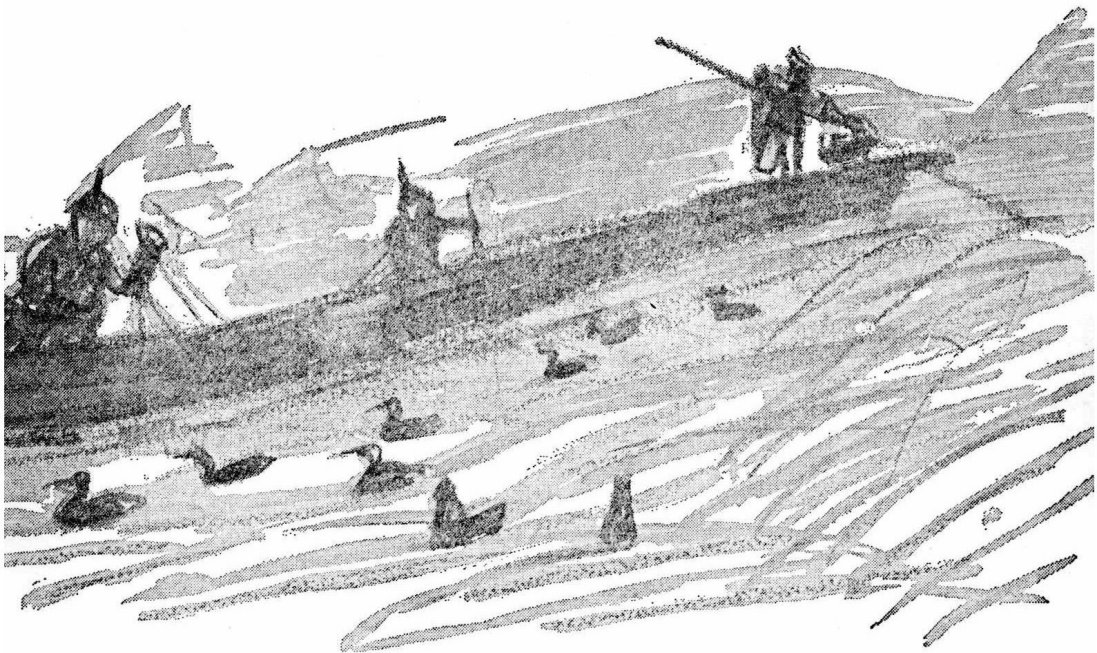
はじめに 3

鵜飼いの鵜 12

一 ヒコヤン 15

二 餌飼い 27

三 わかれ 41



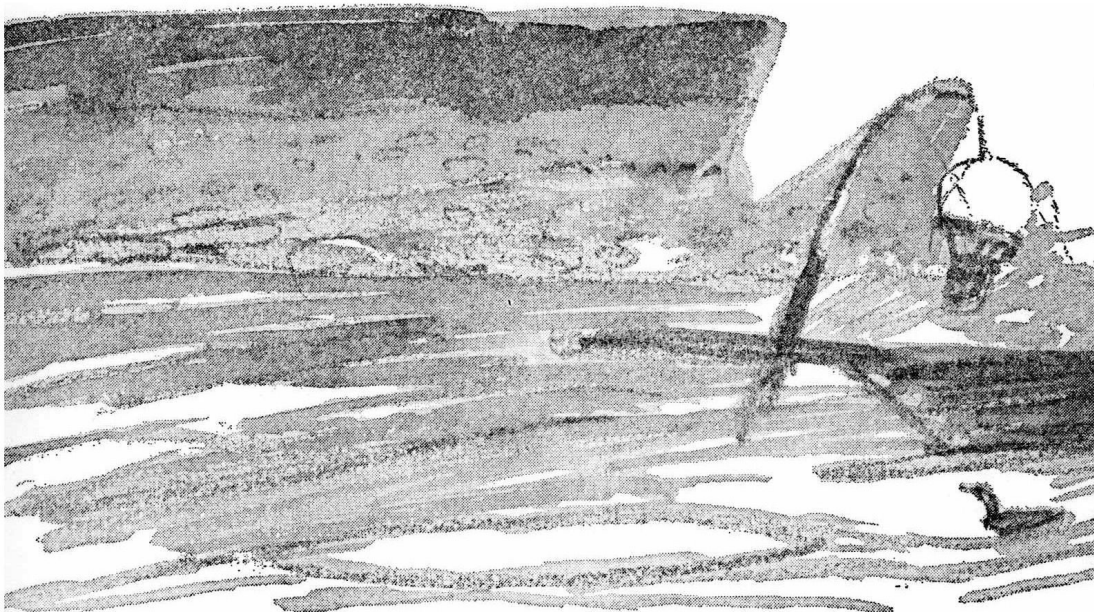
四 川鵜の森 57

五 タニシの先生 73

六 木曾川の川原 95

七 総がらみ 106

八 ヒコヤンのつばさ 123



著者・赤座憲久(あかざ・のりひさ)

1927年、岐阜県生まれ。日本児童文学者協会、中部児童文学会、日本子どもの本研究会に所属し、岐阜の仲間と「コボたち」を毎月刊行する。主な著書に「いっせいに花咲く街」(岩波書店)「砂の音はとうさんの声」(小峰書店)「きょうだいクラス」(PHP研究所)など。

現住所 〒502 岐阜市長良大前町1-6

画家・井口文秀(いぐち・ぶんしゅう)

1909年、富山県生まれ。徹底して取材をすることには定評があり、国内はもとよりシベリア、ローマ、アフリカのケニヤなどをかけめぐる。作品には「コーリャよはばたけ」(童心社)「おへんろさん」(小峰書店)「天にかわりて」(PHP研究所)など多数。

現住所 〒176 練馬区豊玉北4-22

はばたけヒコヤン

——少年鵜匠物語



鶺鴒飼いの鶺鴒

長良川^{ながらがわ}の鶺鴒^{うしろう}匠^{しやう}の家に

あたらしい鶺鴒^{うしろう}がやってきたのは冬のはじめ。

北の海から

なかまと茨城^{いばらきけん}県の伊師^{いし}浜^{はま}へわたりついたその鶺鴒^{うしろう}は

岩^{いわ}におりたつとつばさがねばった。

思わずがむしゃらにはばたいたが

あばれただけ身動^{みうご}きできなくなり

気づいたらクチバシに何かをかまされ

まぶたもぬいあわされていた。

鵜匠うしやうはおくりとどけられた鵜の体に

水でねったアカツチをぬりつけた。

それがこぼこぼかわいてはがれるといっしょに

ねちねちのトリモチがとれた。

チカラバネ※を一枚まいおきにきられ

あきらめきったころ

クチバシのハシガケがはずされ

ぬいあわせてあったマブタの糸がぬかれた。

はじめて川のせせらぎをみた鵜の目から

海の景色けしきは遠く消えさった。

やがて川のくらしにもなれ

夜のやみの川のおもてへ

かがり火のあかりの中へ

およぎ出てくぐる。

鵜匠うしやうのチエは

鵜かがりの火の粉こといっしょに

はるかな鵜のふるさとへとぶのに

手縄たなわにあやつられて早瀬はやせをくだる鵜の目には

もう 北の海の荒波あらのなみはよみがえらない。

アユを追おいかけ

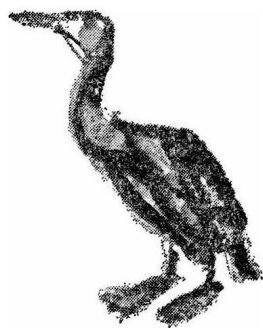
エモノを吐はき出し

舟ふなべりにならんで

鵜匠こしの腰のミノにあまえる。

※注 チカラバネ…つばさにはえそろっている大きいはね。

一 ヒコヤン



岐阜^{ぎふ}の街^{まち}のまん中に、金華山^{きんかざん}という山がつたつたっている。山といっても、高さ三百三十八メートルだから、街の中の気のきいた築山^{つきやま}みたいだ。北側^{きたがわ}の長良川^{ながらがわ}べりが絶壁^{ぜつぺき}になっている。

その絶壁にむきあう川ぞいの高台^{たかだい}に、鵜匠^{うしやう}の家があり、玄関^{げんかん}の前の鳥屋^{とや}には、鵜を入れた鵜かごが十二、三ならべてある。

十二月の川風は、つめたい。